

分らないで了つた。

五日経つた後で杉浦は、小野に會つた時から云つた。

「あの後で冬子さんのとつた態度を、僕は奥さんから聞いたよ。あのために君は却つて幸福になつたらしいぢやないか。冬子さんはまたあんな手紙を見たくもないつて云つたさうだね。僕はそれを聞いて感心したよ。」

彼はそれつきり、その手紙のことに就いては、何事も云はなかつた。確かに彼が保管して置いた筈だが、その後どうしたか分らない。

また後で聞いたところに依ると、それと殆ど同じ文面の手紙が、米田氏の家へ配達されたさうだ。その封筒には米田氏と共に、佐々木重吉氏にも宛てあつたが、佐々木重様とだけで、吉の字が無かつたといふ話だつた。それなぞも疑へばいろ／＼疑へる資料にはなつたが、結局何の證據にもならなかつた。先輩たちはそれを受取ると、夫人に見せようと思つたが、一度あゝした反對をした後でまたそんな手紙を鬼の首でも取つたやうに見せることは、却つて執拗いと思つたので、たゞ笑ひ話にしただけだつた。が、先輩たちは或點まで、眞實それが小野の關係した女から、來たものだと言じてゐる人もあるとの話だつた。

兎もあれ、小野は當時その手紙の生んでくれた幸福に、ずつと満足してゐたのだつた。たゞその時の冬子嬢の態度を、後に柳井に話したところ、彼は例に依つて澄んだ冷やかな眼を上げ、心も眉をひそめて言つた。

「さうかい。それはまゐ君にとつては幸福だつたね。けれども、僕に云はせると、決してケチを付ける譯ぢやないが、どうも冬子さんつていふ人は、無意識かどうか知らないが、芝居氣が多過ぎるやう

だね。——勿論こんなことを云つたつて、君は僕の言葉を承認しやしまいが、どうも一種のコケツトぢやないかね。さうしてさういふところは僕なら好かんね。」

勿論、小野はそんな柳井の言などを、不服でこそあれ、採り上げはしなかつた。そして冬子嬢のあの時の態度に感謝こそすれ、決してそんな疑念などを扶む餘裕はなかつた。

第十一章

それから二三ヶ月の間は、小野にとつて、最も幸福なる時機ともいふべきものであつた。意外外の反對は、また却つて意外の好結果を小野に齎した。小野ももうその夜から、殆ど冬子嬢の内諾を得たと同じやうな、許された状態になつた。

弟子たちが男づ氣のない勝見家へ、宿直する制度はまだ廢されなかつた。そして小野はその宿直の番を、日曜日の夜にもつてゐた。

彼は日曜になるのを待ちかねて、早くから半込の勝見家へ出かけて行つた。その外の日にも遊びに行つたが、公然と殆ど一人で、夫人や冬子嬢と親しく話し得る日曜日の夜は、彼にとつて地上の天國のやうな思ひだつた。

その頃小野は、神田の或る中學校に講師を務めてゐた。そして安い報酬に係らず、忙しい多くの時間を持たされてゐた。で、日曜日は殊に、彼にとつて楽しい日だつた。そして天抵お晝頃から勝見家

へ行つて、或は夫人や令嬢たちと一緒に、音楽會とか展覽會とかの催しに行つたり、または活動寫眞とか芝居とかの見物に出かけたり、または銀座だとか三越だとかへ買物に出かけた。大抵の場合、そんなときには黒田か杉浦も一緒だつた。が、最後に、牛込の奥なる藤見家へ、家族と一緒に歸つて來て泊るのは、宿直番の小野一人だつた。

さうした一日の行樂から、歸つて家に着くと、軽い疲労と共に人々は、ほつとするやうな落着きと、一種の親しさを互に感じ合ふのが常だつた。そして寢る前の數時間を、熱い茶でも飲みながら、その日の出來事を中心に、四方山の話をし合つて、沁みりと打興じるのが常だつた。家の人々——と云つても子供たちだけだが、それらの人々は既にそれ／＼寢て了つて、話に残るものは大抵夫人と冬子嬢だけだつた。三人は殆ど家族のやうに、親しい心持で眠くまで話し込んだ。——それはそんな遊興のために外出しない晩でも同じだつた。さういふときにも矢張り、客が去つた後、子供たちが寢靜まつた後、暫くは三人のみで語り合ふのが例のやうになつてゐた。就寢するのは、大抵十二時近くだつた。

しかも、夫人は大抵先に、隣りの寢室に引込んで、小野が宿直すべき書齋には、冬子嬢と二人が暫く取殘された。夫人と小野とが、「お休みなさい。」と挨拶し合つた後、小野の寢巻に着換へるために脱ぎ捨てた衣類を、冬子嬢が疊んで行つてくれるためだつた。或る時小野は、夫人に拵へて貰つた鉢仙の揃ひを着てゐると、「冬子、お前小野さんの着物を、ちやんと疊んで上げてからお休み。折角、新しい袷が皺になるといけないからね。」と、夫人が云ひつけてくれたので、その後ずつと後まで、冬子嬢が小野の枕許で、脱ぎ捨てた着物を疊んで行つてくれる例を開くことになつた。夫人はさう云つて、粹をきかしてくれた人のやうに、自分はさつさと寢室へ入つて、寢支度にかゝつて了ふのであつた。

小野は寢巻に着換へて了ひながら、その側で叮嚀に衣服を疊みつけてゐる冬子嬢を、もう二人で家庭を作つた時のことまで豫想して、親しく享樂することができた。——彼女も、入學試験の少し前に風邪で熱を出したため、準備が十分できなかったもので、もう音楽學校へ入る希望などは棄て、卒業後は只管家事の手傳ひをしてゐた。だから他の人々の反對もなく、またこの上故障さへ起らず順當に進めば、遅くも一年位後には、さういふ小野の豫想も實現されさうであつた。しかもかうして殆ど許されたやうに、小野の寢室で二人話し合ふことは、小野の心を漫るな夢心地にまで湧き立たせるに十分だつた。彼は、「御免なさい。」と云つて、身體を半ば布団の中に入れながら、すぐ枕許の疊の上で頻りに疊み直し直してゐる、どちらかといへば器用でない冬子嬢の手と、俯向き加減になつて、時々前髪にかくれる仄白い顔を、沁々と覗き込んだ。心なしか、彼女の疊むのには永い間かゝつた。手を伸ばして文を展したり、手で叩いて折り目をつけたりする度に、彼女の平常着の八ツ口が、なまめかしいといふよりは、寧ろ清く綺麗に動いてゐるが、それが小野に堪へられないやうな、愛の衝動を起させるに十分だつた。彼女は一つとところを疊み終る度に、上目使ひに小野を見やつては、微笑と共に低い聲で話しかけるのだつた。

「……この頃學校の方はどう？ 少しはお馴れになつて？」
 話はそんな風な所から始まるのだつた。

「いえ。相變らずへまばかりやつて、生徒に馬鹿にされてゐます。一體僕には先生なんてものは、柄にないことなんですね。是がまッ衣食の道だからと思つて、苦しいけれど仕方なくやつてはゐますが、つくづく厭になる時がありますよ。早く僕もこんな下級な教師なんぞはやめて、どうかして立派に食つて行けるやうにならなくちや駄目ですね。それでないと、貴女と家庭を持つなんてことは到底望まれることぢや無いんですからねえ。考へると少しは心細くなりますよ。貴女は僕がどんなに貧乏してゐても、僕のところへほんとにきてくれるかしら……。」

「え、それや貧乏なんて、何でもありませんわ。」冬子嬢は袖口を疊みかけてゐる手を、その儘止めず此方を見ないで、慰めるやうに云つた。「でもそんな心配はなさらなくてもいいんでせう。お母さまはさう云つてゐらしたわ。……貴方と若し家庭を持つやうになつたら、貴方が、そんな厭な仕事なんぞしないので、落着いて勉強できるやうにして上げるやうにするつて。」

「でも、さう仰しやつて下さるのは有難いけれど、それをばかり頼りにする譯にはいきませんからね。僕だつて一人で自活の道をもつて、立派に養ふべき人は養つて行きたいですからねえ。でなければ、ほんとの生活でなく、眞個の幸福は得られないかも知れませんからねえ。——まあ僕も少し勉強して、貴女をちやんと迎へ得るやうに、一刻も早くなりたいと思ふんですけれど、なか／＼さううまく行きさうありません。貴女もどうかそれまで、氣が變らないやうに待つてゐて下さい。その中にはきつとその時が來ますから……。」

「え、待つてゐますわ。」彼女はちらと目を上げて、小野を見守つた後云つた。「だから貴方も早く誰にも何とも言はれないやうに成つて頂戴。……でも、そんなに心配して急ぐことはないわ。今の中は厭でも我慢して、學校の方だつてお勤めになる方がいゝんだわ。何でも経験だつて、お母さまも仰

しやつてゐてよ。——貴方、學校では一體何年をお教へになつてゐらつしやるの。」

彼女は無意識ながら、軽く話頭を轉じた。

「二年と三年と五年。それから他の先生が林むと、その補缺にどこへでも出るんです。だから忙しくて堪りません。僕らは同じ教師でも、漆石先生が松山へ行つてやつてゐたやうなのは、まるで境遇が違ふんです。」

勝見家の人たちは、嘗て漆石先生も學校を出たてには、中學教師だつた経歴があるので、やゝもすると中學教師といふものを、華想化する傾向があるので、小野はさう云つたのだつた。

「でも、生徒は可愛いでせう。可愛い子もゐるでせう。」

「さうですね。二年の生徒だと、非常によく懐いてくれて、相應に可愛いと思ひますがね。生意氣さかりの四五年あたりになると、若いのと語學が怪しいので、すつかり馬鹿にされさうなんで、寧ろ不愉快で憎い位です。この間も豫習して行かなかつたら、つい間違つた読み方をして、まんまと誤譯指摘をやられましたね。一代の面目を失ひましたよ。」

「さう？ 生徒にもやつぱり原田さんのやうなのがあるのね。」

冬子嬢は、前に在つた誤譯指摘事件を思ひ出して、そんな冗談を云つた。

「どうして、なか／＼東京の中學生は辛辣ですからね。」

小野は苦笑する外なかつた。

「私、貴方が教授してゐるところを、どんな様子だか見たいと思ふわ。」

冬子嬢はまた氣を變へるやうに云つた。

「眞つ平です。そんな所を見られたら、一へんに愛想を盡かされて子ひます。尤も見せたいつたつ

て、見せられやしませんかね。だが、教室でもよく僕は、貴女のことを思ひ出すんですよ。」

「あら、どうして？」
彼女が曇み終へた着物の上のしかゝるやうに、手をついて、鳥渡目に媚を含ませながら、小野の方を窺つた。

「譯讀の時などは、そんな餘裕は逆もありませんかね。英作文などの時、生徒に問題を出して、それを書かせてゐる間なんぞ、ふいと今貴女は家で何をしてゐるだらうなんぞと思ふことがあるんですよ。すると、向うの薄暗い教室の隅だとか、黒い黒板の奥の方に、ぼんやり貴女の姿を幻出することさへあります。何しろ教室でそんなことを考へるなんて、全く良くない教師ですね。」

「だから馬鹿にされるんですよ。……」

「……………」

二人はそんなことを話し合つて、やがて彼女が着物を曇み終ると、それ／＼寝に就くのだつた。が、その中に、着物を曇んで了つてからも、眠くまで話し合つてゐることもないではなかつた。

彼女は曇み終つた着物を、向うの室の隅の座布団の下へ、重しをかけて了つた後、小野のもう寝てゐる枕許へ、近々と躡り寄るやうにして、顔を眞上から窺かせながら、

「もうお眠い？」

と訊いたりした。

「いえ、ちつとも。もつと話し行つて下さう。」

小野はその灯に背いて、眼を見開いた顔を、美しいものに見返しながら、幸福に上つた聲で答へるのだつた。

「私もまだ、ちつとも眠くないのよ。」

かう云つて彼女は、少し身體を小野の方へ崩しかけるやうにした。

小野はそつと手を伸ばして、彼女の枕邊に近く曇の上についてゐた手を、黙つて靜かに取つた。彼女も黙つて取るがまゝに任せてゐた。その位のこととは許されてもいゝ位なことは、二人の間にも了解されてゐた。

「池田さん御夫婦は、随分仲がいいんですよ。池田さんは奥さんを、それや可笑しい位可愛がるんですよ。杉浦さんがさう云つてたわ。」

彼女はやゝあつて、そんなことを云ひ出した。それは謂はゞ時宜に適つた、一種の聯想には違ひなかつた。

「さうですつてね。僕はまだ會はないから知りませんが、さういふ話ですね。併し何しろまだ新婚後一ヶ月と経たないんだから、無理もないんですよ。それに池田といふ男は、吾々の仲間でも良人としては、一番いゝ人間かも知れませんよ。何しろ彼奴は、初めから結婚なんでもものに、少しも幸福な豫想を抱かないで、謂はゞ、まア世間の義理とか、また物質上の得とか、さう云つた動機で貰ふんだと公言してゐた癖に、貰つてみると世にも幸福な、非常に細君を愛する良人になるんだから面白いですね。今度の結婚だつて、人から勧められて、仕方なしに貰ふ氣になつたらしいですがね。」

小野はそんな風に説明した。

池田は彼が前に云つたやうに四月の末に故郷の方で、土地の鳥渡した豪家の娘と、結婚式を擧げて來た。その頃まだ一介の社會部記者に過ぎなかつた彼は、自分が厄介になつてゐた川瀬氏の古いフロツクコートを生立直して、それは可なりいゝ地のものだつた。生理的にも餘りさうした要求のな

い自分が、果して結婚生活などをする資格があるかどうかを危みながら、西の方へ下つて行つたが、それから一週間ばかりすると、小野は一通の葉書を彼から受取つた。それには例の可なり書きつ放しな字で、『萬事はウマク行つた。妻君に對しても愛を感じる事ができた。安心してくれ。』と書いてあつた。しかも葉書で！小野はその文面に見入りながら、自分たちの仲間の中で、恐らく一番結婚生活に興味をもたなかつた彼が、——それは彼は自分の顔を、如何なる女にも愛されることができないものと、認つて信じてゐた故だつた。——一番先に結婚して、しかもそんな打開けた葉書を寄越したことに對して、涙ぐましい程嬉しいやうな、心からの微笑を禁じ得なかつた。

「結婚生活つて、きつとさういふ風なのが却つていゝんだわ。」

冬子嬢はそれを聞くと、少し擲揄ふやうな心持も交へて、そんな風に感想を述べた。

「いや、そんなことはありませんよ。」小野は自衛のために抗辯しなければならなかつた。「結婚は戀愛の墳墓だとか、戀愛結婚は破れ易いとか云ひますが、それも人に依つてのことですからね。池田のやうな男は、あれで今のところ、どこまでも生活に謙遜で、現状に満足して行くといふ心掛けをもつてゐるから、あゝいふ風な結婚をしても、それで幸福なんですよ。けれどもあゝいふ結婚生活が、ほんとに何時までも幸福かどうかは解りません。と云つて僕たちが、まア假りに家庭を営むことになるとしても、幸福かどうかは解りませんがね。少くとも僕は幸福ですよ。そしてできるだけ貴女も幸福なやうに努めますよ。」

「小野さん。貴方一生私を飽きない自信がおありになる？」

彼女は突然そんなことを云ひ出した。

「えゝ、あります。ある積りですがね。」

「でも、何だかアテにならないわね。私には何だか、その池田さんつて人のやうなのが、一番いゝやうな気がするわ。」

彼女は幾らかわざと、微笑を含ませて云つた。

「さうでもありませんよ。是で僕だつて、良人としては可なり善い良人になつて見えますから。」

「どうだか。」

彼女は更に挑むやうに言つた。

「そんなことをいふと苛めますよ。」

小野は取つてゐた彼女の手を、力を入れてぐつと引寄せると、向うも強く引込めようとする努力を抑へつけて、その手の甲へ唇を押し當てた。冬子嬢は少し手を藻掻くやうにしたが、唇を押し當てられると、もう観念したやうになすがまゝに任せてゐた。……

こんなことで、二人つきりになつてからも、いつまでも話をしてゐたので、或夜は夫人に次の寢室からかう戒められさへした。夫人はもう先に、床に就いてゐたらしかつたが、いつまでも二人が起きてゐるので、襖越しに聲をかけたのだつた。

「冬子。何をしてゐるんだい。もうお休み。」

「はい。」

彼女は叱られて初めて気がついたやうに、急にてれて立つて行つた。

「小野さんもういづれもそんなに冬子と話してゐて、何か間違つたことをなすつちやいけませんよ。」夫人は猶そんな注意をさへ、小野に向つて加へた程だつた。

「はア。そんなことは決してしやしません。」

小野はすっかり赤面して、身を小さくするやうな思で、さう答へなければならなかつた。しかしかうして楽しい二人きりの密語は、小野が勝見家へ泊る度毎に、許されたやうに續けられた。そしてそれは小野の戀の、謂はゞ幸福の絶頂にあるものだつた。

二

有樂座で、小野の依囑されて書いた結核豫防劇が、上演されたのもその頃だつた。

それは小野の劇の方の先輩に當る永井氏が、嘗て父君の關係してゐたところから、西里博士や遠島博士らがやつてゐる、肺結核豫防協會といふものゝ依頼を受けて、東京に於いて初めて試みた宣傳劇だつた。そしてその舞臺監督には、やつぱり小野の先輩で、その方面の權威である小宮山氏が當り、その劇の作者には小野が手頃であるといふので、永井と小宮山の兩氏から、脚本を頼まれたものだつた。

勿論小野は、さういふ社會的な宣傳劇などには、もとから多大の興味をもつてゐたので、喜んでそれを引受けた。そして濠石先生門下の、表だけ藝術的操守の固い連中からは、益々通俗劇の作者になつての嘲笑を受けながらも、熱心にその「通俗劇」の脚色に従事した。協會からは色々な参考書を送つてよこした。小野はそれらを参考に、兎に角一つの筋を作り上げた。それは宣傳劇の必要上、かなり程度を引下げた甘物だつた。が、それでも自分としては、さうした問題劇の無味乾燥に陥るよりは、その方がいと信じてゐた。そして更に、その筋の中に採り入れた單純な戀愛問題だが、それを身に沁みて書いた點で、少しは藝術的な満足もあつた。

それはかういふ筋だつた。ある實業家に一人の美しい令嬢があつて、それに許婚の醫學士があつ

た。その醫學士は肺結核の權威たる某醫學博士の門下の秀才だつたが、令嬢はその人を捨て、亞米利加がへりの少壯銀行家で美男の、ある男と戀に陥り、そつちへ行きたいと云ひだす。父の實業家はもとより醫學士の才幹を認めてゐるので、娘を百方説諭したが、どうしても肯かないので、仕方なしに勘當同様に、娘の意志通りにさせる外なくなる。で、仲人役たる醫學博士と、その當の醫學士とを呼んで、事情を話して娘のことは諦めて貰ふやうに云ふ。そしてその代り、——といふ譯でもないが、——凡てを忘れて研究に没頭するやうに二人の後援で獨逸へ留學させるやうに勧める。醫學士は二人の勧めに従ひ、その花のちら／＼散る夕、失戀の底から涙を振り拂つて、すぐ研究のため獨逸へ行くことに決する。

そして數年の研究を終へて、歸つて來て博士の下に副院長のやうになつてゐると、そこへ偶然、前に自分を捨て去つた女が、結核にかゝつて治療を受けに來る。けれども醫學士はその人に對して、決して前の恨みなどは抱くことなく、唯一個の患者として、飽く迄親切に熱心に治療に従事する。そしてその結果、殆ど不治といはれた結核も、たうとう全快して了ふ。一方その女と結婚した銀行家は、すぐ飽きて了つた上に、女が肺病にかゝつたり、色々なことがあつて離縁めたことになつてゐたのが悔いて、再び復縁を求め、醫學士も喜んで元の鞘に收まるやうに勧める。結局、二人は又もとの平和な家庭に歸り、醫學士の恩を徳として、數十萬の寄附金を以て、醫學士のために某海岸へ理想的な療養所を作らす。その盛んな開場式を以て幕を閉ぢる。

その外にも、色々な傍筋はあるが、骨子はそんな風なものだつた。それは無名會といふ、東儀一派の新劇團で、五日間有樂座に上演されることになつた。その頃は小野も、さうした特殊な自分の作品でも舞臺にかゝることそれ自身が、既に胸が躍る位嬉しい時期だつた。

た。而して殊には勝見家の人々に、自分の書いた芝居を見せ得るといふことが、その作品の價值如何に係らず、二重の喜びを禁じ得ないものだった。

その日になるのを待ちかねるやうに、小野は勝見家の人々をその芝居に招待した。

一家の人々は、一度では人数が多過ぎるといふので、二日に分れて見物することになった。第一日は夫人の外に柳町の伯父さんの長三氏と勝見家の男の子たちと、そして杉浦とが行くことになった。初日は、どの芝居でも、何となく騒がしい中にも、輝かしいものだった。だからその日にこそ、小野は冬子嬢たちを連れて行きたい気もしたが、それも止むを得なかつた。

芝居には、可なりよく稽古が積んでいたので、相應によく見られた。そして小野が巧んだヤマへ来ると観客の多くは可なり感動した。泣いてゐるものも、黙くはなかつた。

勝見家の子供たちも、まださうした人情などはよく解してゐないに係はらず、副人物として小野が描いた、ある活潑な新時代の女性の舉措や言動には、他の見物と一緒に連れて笑つた。そして自分と同じ位の少年が、ある裏長屋に住んでゐて、療養上の迷信と手遅れのために、父を肺病で失ふところなどへ来ると、さすがに眼に涙を溜めて見てゐた。彼らは少しも退屈はしなかつた。それに小野は一種の安心と嬉しさを覺えた。

「なか／＼面白い芝居ですね。」

長三氏もお世辭でなく云つた。

「割りによく出来てゐるわね。」

夫人も合槌を打つてくれた。たゞ杉浦だけが微笑とともに、冷かすやうに云つた。

「相變らず小野式の甘さと、名ゼリフがあるね。それに最近の述懐が随分澤山あるらしいんでやり切

れない。」

しかし小野は可なり満悦してゐた。

第二日目には、また夫人が、令嬢たちを引具して、見物に来てくれることになった。そして一つは冬子嬢の望みもあつて、池田夫妻を招待することにした。自分たちの戀愛の、謂はゞ劇外劇の、見物に使ふやうで悪い氣もしたが、かういふ機會に池田夫妻に冬子嬢を紹介したい欲望もあつたのだつた。が、池田は、それを察したかどうか、細君を連れては來なかつた。

美しく着飾つた令嬢たちが、ずらりと並んで腰を掛けた側に、同じく腰をかけて見てゐる小野は、云ふまでもなく可なり幸福だつた。そして得意でもあつた。見物は、協會員たる市内の醫師の家族や何か主で、可なりいゝ階級に屬してゐた。そして美しい人もな／＼多かつた。が、四五人の令嬢が、年齢は違つても、一團になつてゐる勝見の一家は、可なり人目をひいた。それも小野には、何となく嬉しかつた。

かういふ場所へ来ると、令嬢たちの間でも、殊に派手な顔だちの二番目の定子嬢が、引立つて見えた。それに少女から乙女に移り際の、すんなりした三番目の令嬢の姿も、水際立つて見えた。それに比べると冬子嬢は、寧ろ陰氣に沈んで見えたが、その内輪な淑からしい容姿は、落着いた姉らしさを以て、やつぱり小野の選擇を認らせないことを感じさせた。顔だつて、これだけゐる見物の中で、美醜の容觀的比較はいざ知らず、感じは一番いゝと、そんな風にすら小野はひそかに思はざるを得なかつた。——兎も角も彼は、かうして自分の戀人と並んで、自分の芝居を見る機會を、この上なく天に感謝したかつた。

芝居が始まると、令嬢たちは熱心に、舞臺から眼を離さなかつた。が、小野は屢々舞臺と令嬢たち

との顔を、等分に見比べて、その反應を心配しなければならなかつた。令嬢たちは割合に、面白がつて見てゐた。そして行儀よく少しも傍見などはしなかつた。たゞ、二度冬子嬢が、小野の方を顧みて微笑して見せた。それは小野が、特に實際今もつてゐる戀愛に對する感想めいたことを書いたところ、彼女も思ひ當つたに相違なかつた。そしてそれを小野に傳へたものらしかつた。

三幕目の世話場へくると、見物に先んじて令嬢たちは手巾を取出した。中にも、まだそんな感情はさう湧かせまいと思つてゐた、一番末の悪戯ざかりの令嬢が一番早く噀り上げ始めた。——それも小野には嬉しいやうに感ぜられた。しかし冬子嬢は、一番遅くつゝまじやかに涙を拭ひ始めた。それも小野には却つて頼もしかつた。

幕間に池田と會つたら、彼は小野にかう云つた。

「冬子さんつて、思つた程シヤンぢやないが、割りに感じはいゝぢやないか。」

「さうかい。」小野は少し操つたいやうな顔をして云つた。「どうして今日は細君を連れて來なかつたんだい。」

「恥しいからつて、どうしても來ないんだよ。僕も強ひて連れて來なかつた。僕の家内なんぞは、一個の家婦に出來てるんだからね。かういふ晴れがましい所へ出て來るのは、向うでも厭なんだから。」

「さうかい。でも、それは残念だつたね。僕も今日はお目にかゝれると思つてゐた。」

「僕のは君のなんぞと違つて、得意になつて人に見せたい程の家内ぢやないよ。」

かう池田は、温かい皮肉を云つて、聲のない笑ひを笑つた。それにも小野は満足の笑顔、合せなければならなかつた。

最後の幕が済んで、皆一緒に家へ歸つてからも、何かと芝居の批評めいたことが出た。

「少し淋しいけれど、でも、随分よかつたわねえ。」

勝負家の令嬢たちよりも、幾らか芝居とか小説とかに馴れてゐる長三氏の娘の、千恵子嬢がそんな批評を下した。

「私泣くまいと思つてたけれど、やつぱり泣いちゃつたわ。」

二番目の定子嬢が云つた。

「博子さん。」と、夫人もその會話の中に入つて、一番末の令嬢の名を呼んで云つた。「貴女が一番早く泣きだしたわねえ。平常きかん坊のくせに、悲しいなんてことが解るの。」

「それやア解るわよ。」末の令嬢は口を尖らして、同意を求めるやうに、三番目の令嬢を顧みた。「ねえ。」

「え。」と三番目の秀子嬢もそれを受けて、「だつて、誰にだつて、悲しければ悲しいわ。」

「だけど。」と冬子嬢は口を挟んだ。「まだ誰も泣かないうちに、博子さんが一番先に、大きな聲で泣きだすんですもの。私、皆に見られるやうな氣がして、恥しくなつちやつたわ。」

「それやア、大きい姉さんはエライわよ。」

末の令嬢はまた口を尖らした。

冬子嬢はその攻撃にもめげず、更に云つた。

「私、あの幕は、そんなでもなかつたわ。それよりか却つて、一幕目の方が可哀さうだと思つたわ。」

「へ、え、さうですかね。どうしてです。」

小野は受けた。一幕目といふのは、主人公の醫學士が、失態を宣告されて獨逸へ行く決心を定める

ところだつた。

「だつて可哀さうだつたわ。」と、幾らか小野だけに聞えるやうに、低い聲をして云つた。「あの女の
人、随分憎らしいのね。どうしてあんなに悪く、あのお嬢さんをお書きになつたの。」

「だつてさうしないと芝居になりませんか。」

「でも、あのお医者さん、貴方御自分の積りなんでせう。」

冬子嬢は小野に、揶揄ひ半分ながら、半ば眞面目に追究して來た。

「さうでもありませんけれど、……」

小野はわざと曖昧に、微笑で濁した。

「いえ、きつとその積りよ。ですけれど、貴方もしあゝいふ目にお遣ひになつたら、やつぱりあ
お医者さんみために、一生懸命勉強なさる？」

「さあ、どうですか。意氣地がないから、できないでせう。しかしどつちにしろ、あんな目には遣ひ
たくないもんですねえ。」

小野も半分眞顔で答へた。

「それに、あんな女の人はゐないと思ふわ。」

そんなことで、その場の話は済んで了つたが、その對話が後になつて、讖を成さうとは、小野も、
或は恐らく冬子嬢自身も全く知らなかつたであらう。或はまたその頃から既に、冬子嬢の心には、潜
在的にさういふ心が潜んでゐ、またそれを本能的に豫知して、小野も自分の境遇を、その芝居に擬へ
てゐたのかもしれない。……

しかし小野としては、その頃は表面の事實上、夢にもそんなことを感じなかつた、幸福な時代だつ

た。得意な時代だつた。而して、まさかそんなことはあるまいと思へばこそ、そんな芝居を書いて、
最悪な場合を想像して、享樂してゐたにちがひなかつた。兎にかくそれは小野の戀愛の、黄金時代と
もいふべきものだつた。

先輩は蔭ではいざ知らず、もうそれつきり強ひて、小野の問題に就いて反對しようとはしなかつた。
曲折を経た小野の戀は、波瀾の後の平衡状態を以て、その儘ずつと過ぎつゝあつた。そして猶も順調
に進んで行きさうに思へてゐた。

季節の春は、かうしてゐるうちに、いつとはなく過ぎ去つて了つてゐた。が、小野にとつてはその
春が、短くしてしかも永いものだつた。彼の心にはいつまでも永く、その春が残つてゐる思ひがした。

第十三章

やがて、重苦しく、甘く、惱ましかつた春は去つた。そして夏は來た。勝見家の庭では、先生が遺
愛の芭蕉が、巻いた葉を腕のやうに伸ばし始め、梧桐が仄黄いろい緑を一面に擴げた。小野の心もい
ろ／＼な波瀾を経て幾らか新緑のやうに輕らかになつてゐた。

七月には、黒田と杉浦とが大學を卒業した。二人は柳井や小野と同期だつたが、中途で怠けて休ん
だりしたために、一年遅れたのだつた。彼らは殆ど講義へも出なかつた。だから學校を卒業したつて、
別に平常と變りはない程だつたが、兎に角芽出度く、學士號だけは得た譯だつた。